

札幌市博物館活動センター 情報誌 ミューズ・レター

Muse Letter

No.75
July 2021

ヒバリ

札幌郊外の広い草原や農地で見られる鳥です。スズメ^{もく}目ヒバリ科の鳥ですが、体長はスズメより少し大きく20cmほどです。春から初夏に、空高く舞い上がりながら高い声でさえずるので、ついつい声につられて空を見上げてしまいます。ヒバリが昭和の有名な歌手の名前になったのもうなずけます。



撮影: 齋藤 晃

天然記念物指定100年

藻岩原始林、円山原始林



今年、2021年は藻岩山と円山のメモリアル・イヤーです。なぜかという、今から100年前の1921年(大正10年)3月3日に、この2つの山の一部が国の文化財である天然記念物「藻岩原始林」、「円山原始林」に指定されたからです。

「原始林」というと「人間が立ち入ることのなかった森」のような荘厳なイメージがありますが、人間が利用してきた歴史もあります。開拓初期には、山の木々は薪や炭の原料として人々の生活を支え、円山から切り出された石は建築材料として街や産業の基礎を築くのに役立ちました。札幌の街に人や産業が集まり、街が発展できたのは、天然資源の豊富な自然が近くにあったからだといえるでしょう。現在も、藻岩山と円山は景色やスキー、気軽な散策などが楽しめる身近な山であり、「原始林」という言葉とのギャップを感じてしまいます。しかし、天然記念物指定の理由として「市街地近くの小さな山だが、木の種類が豊富だから」とされていることを考えると、むしろ、原始林と“都市の森”という二面性こそが重要といえます。

街に近い森は、まだ交通が不便だった明治から昭和初期の地元の研究者や植物愛好家に

とって、アクセス抜群の調査・観察地でした。その頃に採集された押し葉標本は、古文書のように過去の情報を教えてくれます。

例えば、1939年(昭和14年)7月2日に井上藤二^{いのうえとうじ}氏が藻岩山で採集したクマガイソウの標本を根拠に、北海道大学の研究者が発表した論文により、藻岩山はクマガイソウの日本で最も北の生育地(北限)とされました。クマガイソウは温帯に生育するラン科の絶滅危惧種で、道内では主に道南から日高にかけての林内に生育し、札幌市(藻岩山以外)と小樽市では2000年以降にもわずかに記録があります。

しかし、博物館活動センターが2000年(平成12年)～2003年(平成15年)に行った藻岩山と円山の植物調査では、クマガイソウは確認できませんでした。そこで、上記の他に藻岩山で採集された標本があるか他の博物館の標本を調べに行きました。その結果、小樽市総合博物館収蔵の「井上藤二コレクション」に1点(1937年(昭和12年)採集)、北海道大学総合博物館には論文に引用された標本の他に1点(1940年(昭和15年)採集)がありました。論文ではMt. Moiwa(藻岩山)としか

書かれていませんが、標本を直に調査したことで採集地が「藻岩山養老院北側」と分かりました。古い地図でみると、現在の慈啓会病院付近と推測でき、市街地に近い場所と言えます。藻岩山での1940年(昭和15年)以降の記録や標本が無いことから、昭和初期のわずかな期間だけ藻岩山で見られたものの、その後、藻岩山のクマガイソウは何らかの原因で衰退したと考えられます。



写真上:クマガイソウ(2006年撮影。札幌市内。松井洋氏寄贈植物写真より。)

写真左:宮部・館脇博士の論文に引用された標本(北海道大学総合博物館収蔵 SAPS025933)

このように、天然記念物に指定されただけで終わらず、長年の科学的な記録があるからこそ、現在の私達がさかのぼって検証することができます。天然記念物指定100年を迎えても新たな情報が追加・更新される「生きた」フィールドが残されているということが、天然記念物や

原始林という名称の深味を増していくのではないかと思います。

文/学芸員 山崎 真実

引用文献

宮部金吾・館脇操, 1940. 北日本植物誌料(十三). 札幌博物学会報. 第十六号第三号: 181-191.
 山本亜生(編集), 2003. 小樽市博物館所蔵資料目録第17集 小樽市博物館所蔵植物標本目録(井上藤二コレクション). 小樽市博物館.
 札幌市博物館活動センター, 2005. 天然記念物 藻岩原始林・円山原始林の植物リスト及び収蔵資料目録. 札幌市観光文化局文化部.



写真: 伏見岳志氏制作の標本

ホット
コラム

展示室につき

大人になっても、心は昆虫少年!



○月×日 展示解説員 前田 亜沙美

ランニングの途中に立ち寄ったのがきっかけで常連になってくれた伏見さん。趣味が標本制作で、博物館活動センターにも

何度か見せに来てくれました。材料は百円ショップを駆使し

つつ、昆虫の羽根の広げ方や美しく見せる方法を日々研究し、

博物館にある標本とは一味違う個性あふれる標本を制作されています。

春先に見せてもらったアメリカザリガニの脱皮標本は、息子さんが手塩にかけて育てたザリガニが脱皮する度にお父さんの伏見さんが丁寧に標本にするという親子の共同作業だったそう。三年間の成長記録が分かり、博物館の資料にもなりそうなのでも興味深い標本作品でした。

当センターでは、子どもから大人まで、自由な楽しみ方で自然史に触れ、関心を深めてほしいと考えています。ふらっとカフェに立ち寄るように、当センターにも立ち寄ってもらえたらうれしいです。まずは気軽にお越しください。

コレクションクエスト

ふだん公開していない
収蔵物を紹介します。
さあ、標本の世界を冒険だ!

昨年度、博物館活動センターで冷凍保存されていた「ハシブトガラス」が、骨格復元標本として組み立てられ、収蔵されました。



新着資料「ハシブトガラス」SMAC3901

文/学芸員 古沢 仁

ご存知の通り、現在の鳥類は恐竜類の一部、じゅうりゃく獣脚類から進化したものです。いわば恐竜は白亜紀の終わりには絶滅せず、鳥類として現在も生きているといってもいい存在です。体の下に真っすぐ伸びた脚による二足歩行、かぎ爪のついた指、肩関節や手首の動きなどは初期の恐竜と共通する特徴です。

そう思って見ると、普段見ているハシブトガラスもどことなくティラノサウルスのようにも見えてきませんか？

File No.11
完成! 地形模型
プロジェクションマッピング

SMAC活動レポート

当センターで行われる、市民の自主的活動や、学校との連携など、さまざまな活動を紹介します。

1億3,000万年前、札幌は海でした。南区定山溪の薄別川流域で見られる泥岩がその名残で、当時海底に積もった泥が固まったものです。

その後、地殻変動により陸になったり海になったりしながら、札幌は1,500万年前ころには「石狩トラフ」という深さ6,000mまでの半深海になりました。

この石狩トラフの地層から、博物館活動センターで展示中のサッポロカイギュウや、現在研究中の小金湯産クジラが発見されています。

それ以降、札幌はどのような大地の変化を繰り返して、今に至るのでしょうか。

当センターでは、石狩湾から支笏湖までを範囲とした地形模型を作成し、そこに1億3,000万年前から現在までの札幌の大地の成り立ちをギュッと約7分半にまとめた解説付き映像を映

すプロジェクションマッピング展示を制作しました。

楽しく分かりやすく札幌の大地の成り立ちに触れてみませんか。

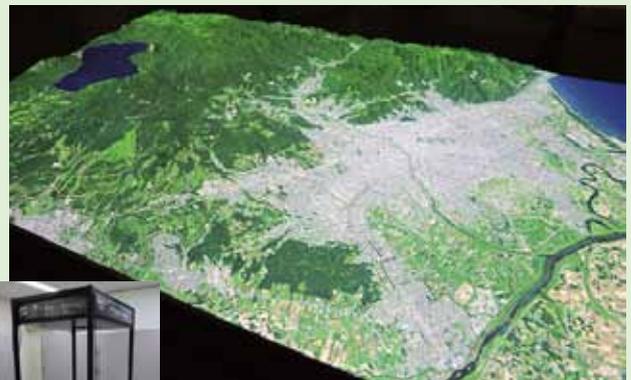


写真: 地形模型
(上: 3Dで現す市街地、左: 機器全景)



- 交通アクセス**
- 地下鉄南北線「澄川駅」北出口から徒歩約10分
 - 地下鉄南北線「南平岸駅」東出口から徒歩約14分

札幌市博物館活動センター information

入館料: 無料
開館日: 火曜～土曜 開館時間: 10時～17時
休館日: 日曜・月曜、祝日、年末年始(12月29日～1月3日)



ホームページアクセス
二次元コード



発行 札幌市博物館活動センター

〒062-0935 札幌市豊平区平岸5条15丁目1-6 Tel: 011-374-5002 Fax: 011-374-5014
Email: museum@city.sapporo.jp ホームページ: <https://www.city.sapporo.jp/museum/>



ミュース・レターは、植物油インキおよび、環境省が定める「グリーン購入法」の適合紙を使用しています。